様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４６５

研究課題名（和文）ル・クレジオとアジア文化

研究課題名（英文）Le Clezio and Asian Cultures

研究代表者
中地　義和（NAKAJI, Yoshikazu）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：５０１８８９４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究（2020～2023年度）の直前から実施期間中にかけて、ル・クレジオは極東に関する書物を3冊刊行した。１ソウルを舞台とし、登場人物が全員韓国人の小説『ビトナ、ソウルの空の下で』（2018年／邦訳2022年）、２中国各地での講演集『中国での15の語らい―詩的冒険と文学的交流』（2019年／邦訳『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』2022年）、３中国古典詩をめぐる評論『詩の波は流れ続ける』（2020年／本邦未訳）である。本研究はこれらの書物を読み解き、翻訳・解説する作業（１は研究代表者が、２は研究協力者の鈴木が担当）を軸に展開され、ル・クレジオ文学の脱西欧的基盤が相当程度解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年のル・クレジオは、上記３冊の他に、先祖が移住して５世代を重ねたモーリシャス島を舞台とする小説シリーズの第４作『アルマ』（2017年／邦訳2020年）と、幼少期をめぐる自伝『ブルターニュの歌』（2020年／邦訳2024年）を発表した。研究代表者は本期間中にこの2冊の翻訳・解説も手がけた。こうした作業を通じて、彼のアジア文化、とくにその詩的、精神的側面への並みならぬ関心は、若年からの中南米のインディオ文化やアフリカ文明への関心と同様に、彼の脱西欧的志向の広がりと、他言語に翻訳される以前に彼の文学に本来的に内在する世界文学としての特質を明かすものであることを、本研究は示し得たと考える。

研究成果の概要（英文）：Immediately before and during the implementation of this research (2020-2023), Le Clezio published three books on the Far East. (1) "Bitna, Under the Sky of Seoul", a novel set in Seoul and whose characters are all Korean (2018/tr. 22); (2) "Fifteen Talks in China: Poetic Adventures and Literary Exchanges" (2019/tr. 22), a collection of lectures given in various cities of China; (3) a critical essay on classical Chinese Poetry, "The Waves of Poetry Keep Flowing" (2020/not translated into Japanese). The present research revolved around the reading, translation, and commentary of these books : (1) by the principal investigator and (2) by Suzuki, a research collaborator, and the non-Western basis of Le Clezio's literature was clarified to a considerable extent.

研究分野：フランス文学

キーワード：ル・クレジオ　アジア文化　中国古典詩　ポストコロニアル　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、現代フランスの最も重要な作家の一人で、またきわめて特異な作家であるル・クレジオ（名はジャン=マリ=ギュスターヴ、1940- ）の、半世紀以上に及ぶ創作活動を視野に収めながら、非西欧の文化、なかでも中国、韓国、日本の東アジア文化が、彼の形成にどのように影響し、創作にいかなる霊感を与えてきたかを、作品の変遷に即して解明しようとするものである。

ル・クレジオは、1963 年のデビュー以来、これまでに長篇小説 20 作、短編小説集 7 冊、評論集 12 冊を発表したほか、アメリカのインディオ神話・歴史に関わる文献の翻訳、対談集等を合わせると著書は 50 冊に及ぶ。2008 年のノーベル文学賞受賞後も筆力は衰えることなく、毎年のように新作を発表している。この作家を理解するうえで重要な点が二つある。

第一に、彼がフランス革命時にブルターニュ地方からインド洋西部のモーリシャス島（当時のフランス島）に移住したフランス人移民の六代目にあたり、父親の代にフランスに戻った引き揚げ二世だということである（彼自身は南仏ニースで生まれ育った）。子供時代、アフリカでイギリス軍医をしていた父親が 50 歳の定年を迎えて帰国すると、家庭では生活全般にモーリシャス風が徹底され、とくに食生活でそれが顕著になる。フランス人が日々食するビーフステーキやアイスクリームなどは食卓に載らず、米と野菜の雑炊が主食だったという。未来の作家は、フランスにいながら自分をほかの子供たちとはかけ離れた「異分子」のように感じる疎外感を味わい、いつか帰るべき祖国への思いを募らせる。事実ル・クレジオは、フランスとモーリシャスの二重国籍保持者である。第二に、この作家が若くして異文化に強い関心を示し、その文化圏に長く滞在し、それぞれの文化を独自に同化しながら創作を行なってきた事実である。フランスの作家でありながら西欧中心的な思考とは無縁で、逆に、フランスや西欧を外から批判的に捉える傾きが強い。小説の舞台は多くは西欧以外、登場人物もしばしば非フランス人である。彼にとって異文化の重要な極が四つある。①中南米のインディオ世界、②ブラック・アフリカとモロッコ（妻ジェミアの出身地）を合わせたアフリカ、③モーリシャス、④極東を中心とするアジア、である。

四つの極のうち、①～③については、それらがなぜ「ここ」なる西欧から彼を解き放つ「他所」たりうるかを作家自身が語り、そこを舞台とする小説も書かれている。研究も相当程度進んでいる。ル・クレジオを動かすものは、「悪しき西欧」*vs*「好ましい他所」という単純な二元論ではない。「他所」とは、西欧近代に固有の合理主義、審美主義、人間中心主義、自文化中心主義が稀薄であることで、西欧的価値観のなかで弱まった人間と宇宙とのつながりや人間相互の紐帯を回復する可能性を孕む場である。ではアジアとの関係はどうか、というのが本研究の問題提起である。

ル・クレジオは早い時期からアジアへの関心を表明していた。1966 年、兵役代わりの海外派遣協力の行先として希望したのは、フランスが国交を樹立したばかりの中国だった。希望は通らず、実際の派遣先はタイになるが、バンコクで漢字の学習を始める。次いで海外派遣協力の後半期を過ごすことになったメキシコでも、孔子、孟子、老子の中国古典思想を翻訳で読む。やがて『紅楼夢』や『水滸伝』など明清代の小説や老舎ほかの近代小説にもなじむようになり、老舎の『四世同堂』の仏語版（98）に序文を寄せている。

日本への関心はというと、少年時代、『古事記』の天地開闢とアマテラスの物語を知り、神道の紹介本『物語と伝説』によって日本の多神教やアニミズムに興味を覚える。しかし日本文化から受けた最大の衝撃は、15～16 歳のときにニースのシネクラブで観た百本を超す日本映画で、なかでもとくに感銘を受けたのは溝口の〈雨月物語〉である。作家は「映画が芸術であることをはじめて理解した」と語り、講演等で繰り返しこの映画に言及する。2007 年刊の『ル・クレジオ、映画を語る』でもこれにかなりの紙幅を割き、自らの戦争体験に引きつけて「戦の映画」として分析し、この映画における女性の視点の優位を強調する。さらに、これは本研究の中心課題のひとつとなるが、1970 年代には、鈴木大拙の著作を通じて禅に強い関心を寄せた。翻訳者の

故望月芳郎氏との対談で、「答えなき問い」という禅問答のコンセプトを小説化する抱負を語っている。事実、78 年の短篇集『モンドーとその他の物語』（*Mondo et autres histoires*）の巻頭篇の表題＝主人公名「モンドー」は、「問答」に由来する。

しかし、近年に至るまで、ル・クレジオの東アジアとの接触は書物や芸術表象に限られ、じっくり滞在する機会がなかった。関心は表明しても、感知したものを論じたり小説化したりするには至らなかった。21 世紀に入って、まずは韓国を頻繁に訪れる機会が生まれる。朝鮮語を学び、当地の作家、映画監督らと交わり、各地を訪ねて伝統や神話に触れる。2007 年から翌年にかけて梨花女子大学校でフランス文学の客員教授を務める。また、2013 年以降、秋に中国の南京大学に招かれ、「芸術と文化の解釈の複数性」「文学と映画」「世界の詩」「文学と神話」など毎年広範なテーマを講じている。2006 年には、1967 年タイからの帰国の途上で初来日して以来 39 年ぶりに日本を再訪、東京外語大学、一橋大学などでラウンド・テーブルを行ない、北海道のアイヌ村や奄美大島を訪れている。2009 年から 18 年にかけて東京大学で、申請者の招聘に応じ、自身の作品や広く文学や芸術について語る講演を四回行なった。こうしてル・クレジオは近年、アジア文化を論じ、アジアを舞台とする小説を書くようになった。小説では、アメリカ駐留軍兵士と現地人女性の間に生まれ、父親に見捨てられた混血児という戦後の韓国と日本に共通して存在した問題（「嵐」2014 年／研究代表者による邦訳、翌 15 年）や、南北朝鮮の分断の現実（『ビトナ、ソウルの空の下』18 年／研究代表者による邦訳、翌 22 年）を取り込み、講演集『中国での 15 の談論―詩的冒険と文学的交流』（19 年／研究分担者鈴木による邦訳『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』23 年）では、「文学と自然」「文学とグローバリゼーション」「書物と現代世界」といったアジアに限定されない問題を、アジア的視座を同化しつつ再検討する俯瞰的思索を披露している。

２．研究の目的

ル・クレジオ研究者で彼の作品の翻訳や分析を行なってきた二名と、ル・クレジオ研究者ではないがフランス 20-21 世紀の作家における非西洋の牽引の問題に関心を寄せる二名とが協力し、戦後、フランス語圏文学やクレオール文学の台頭と併行して顕著になった脱-西欧中心主義の文学・思想の潮流を踏まえながら、その流れに組み込めない作家の独自な位置を定義することをめざす。

21世紀に入って、ル・クレジオにとって東アジアは、書物や映画を通じて遠くから牽引する世界から、自ら繰り返し訪れ、じかに経験を深めうる世界へと変容した。まさに「ル・クレジオとアジア文化」を考察するための機が熟したと言える。ここ十年の間に蓄積された豊富な素材に基づいて、この作家にとってアジア文化が持つ意味を吟味し、1970年代の小説やエッセイも視野に収めながらとくに近年の作品のアジア的霊感ともいうべきものを解明することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は三つの軸に沿って進められた。

第一に、調査事項として、ル・クレジオのアジア滞在と、滞在中の活動の詳細の調査。さしあたり、南京大学の張璐(ﾂｧﾝ･ﾙｰ) 副教授の提案で、梨花女子大学校（ソウル）の宋起貞（ｿﾝ･ｷｼﾞｮﾝ）教授とも協力して、日・中・韓三国への作家の滞在の年表を作成し、この情報交換を活用して、ル・クレジオのアジアとの直接的接触を跡づける。

第二に、1970年代の著作（『向う側への旅』75年、『地上の見知らぬ少年』78年、『モンドー、その他の物語』78年）に、作家が捉えるかぎりでの「禅」がいかに反映しているかを、今日的知見を踏まえて再検討する。

第三に、これが本研究の主軸であるが、韓国を舞台とする最近の小説『ビトナ、ソウルの空の下で』（2018年）、近年中国各地の大学や文化施設でル・クレジオが行なった講演の集成『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』（2019年）、中国古典詩論『詩の波は流れつづける』（20

年）の分析、翻訳、解説作業を通して、作家とアジア文化の関係、アジア文化から汲みとったものがどのように創作に生かされているかを分析する。

以上を踏まえて、アジアへの関心は他の文化圏への関心に比して、とくにどのような触発を作家にもたらしたか、また、アジアの文化（非西欧の文化）に強い関心を寄せた20－21世紀の作家（クローデル、セガレン、ミショー、アルトー、レリス、デュラス、ブーヴィエら）と比べて、ル・クレジオの例はどのような意味で独特かを検討する 。

４．研究成果

調査事項であったル・クレジオのアジア滞在の年表作成は、研究代表者と、南京大学の張璐（ツァン・ルー）副教授と梨花女子大学校（ソウル）の宋起貞（ソン・キジョン）教授との共同作業で本研究初年度に完成し、パリで刊行されているル・クレジオの国際的研究誌『ル・クレジオ手帖』第 13 号（2020 年）に発表した。そこには、1966‐67 年バンコクのタンマサート大学で兵役に替わる教職を果たした際のタイ滞在を皮切りに、2020 年時点までの作家のアジア滞在が、極東（中国、韓国、日本）のほか、調べのつく範囲で広域アジアの国々（カンボジア、台湾、ウズベキスタン、インド、ヨルダン等）への滞在も含めて網羅されている。

本研究が主たる分析対象としたのは、開始直前にル・クレジオが発表した、東アジアの社会や文化に想を汲む三冊の書物である。⑴ソウルを舞台として登場人物全員が韓国人の小説『ビトナ、ソウルの空の下で』（2018 年／邦訳 22 年）、⑵中国での講演集『中国での 15 の談論―詩的冒険と文学的交流』（19 年／邦訳『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』23 年）、⑶中国古典詩をめぐる評論『詩の波は流れつづける』（20 年／本邦未訳）である。⑴は研究代表者が、⑵は研究分担者鈴木が、それぞれ翻訳・註・解説を担当し、本研究期間中に刊行した。⑶については、ル・クレジオの読んだ中国詩はフランス語訳または英訳であり、それをさらに日本語に訳すと、中国語からのダイレクトな翻訳とは少なからぬずれが生じるため、この評論の邦訳は技術的にむずかしいことが判明した。また、研究代表者は、本研究期間中に直接東アジアにはフォーカスしないが、先祖の地モーリシャスにちなむ小説『アルマ』（17 年／邦訳 20 年）と、幼少期をめぐる自伝的エッセイ 2 篇を収めた『ブルターニュの歌』（20 年／邦訳 24 年）の翻訳を刊行し、くわしい解説を添えた。

⑴の小説では、朝鮮戦争の荒廃のうえに築かれた現代の巨大都市ソウルの酷薄な現実―おびただしい自殺や自殺未遂、未婚の母による嬰児遺棄、牧師による女子へのセクハラ、半地下での貧困生活、ストーカーの出没、等―をレアリスムの筆致で描きながら、同時にその住民の精神の基層を規定する輪廻転生の生命観や、自然と人間の間に介在する霊的存在を想定するシャーマニズム的世界観を取り込んでいる点に注目にした。しかもそれは、若年のル・クレジオが中米のインディオ世界のなかに発見し、『悪魔祓い』（1971 年）で熱烈に語った世界観に近い。1970 年前後の数年にわたり作家が毎年数カ月間起居を共にしたエンベラ族にあっては、芸術とは少数の才能ある人間の作品を自ら創造する才をもたない多数の観衆や聴衆が展覧会やコンサートという場で享受するという西洋的形式をとらず、部族構成員がこぞって皮膚に描く絵や集団で歌う歌そのものであり、それらは自らに取りついた悪霊を祓いのける呪術の意味を持った。作家が今日の韓国文化のなかに見てとるのは、それまで未知であった何かではなく、半世紀近く前にインディオの世界に感知していた超自然的なものへの感性、戦争による徹底的な荒廃の上に築かれた超モダン都市に住まう人々の内面にも独特のかたちで息づいているアルカイックな心性であることが確認された。

⑶の中国古典詩論において、ル・クレジオが最も強い傾倒を示すのは、李白の五言絶句「獨坐敬亭山」の解説が示すように、見る主体（私）と見られる世界との境界が廃棄され、両者が融合する瞬間、眺める「私」が眼前の敬亭山になってしまう脱自（エクスターズ）の瞬間である。それこそがすぐれて詩的な瞬間であると作家は考える。雨後の色鮮やかな苔の緑が地面から立ちのぼって衣服を染める幻想を読んだ王維「書事」や、同じ詩人の「空の青を身にまとう」いう表現（「山中」）への称賛も、そこに主客融合を見るからである。そのような瞬間をル・クレジオは

初期の作品から自作のなかにちりばめている。デビュー作『調書』(1963 年）の主人公は、郊外の廃墟のような住まいで一匹の白ねずみを見つけ、それを凝視するうちに自らねずみに変身した錯覚にとらわれる。1978 年の詩的エッセイ『地上の見知らぬ少年』では、木立のなかに足を踏み入れる瞬間における樹木との精妙な一体感覚が記されている。このような主格融合の詩学は中国または極東の占有物ではなく、フランス詩や西洋の詩にも見られる。しかしル・クレジオが詩的なものを強く感知するのは、漢詩や芭蕉の俳句のなかである。極東の詩が彼のなかにそうした志向を生み出したというよりも、元来彼のなかにあった資質が極東の詩歌と共鳴し、いっそう研ぎ澄まされたたと考えるほうが当たっているだろう。

⑵の講演集は、2013 年から 2017 年まで毎年秋の３ヵ月に中国の南京大学招聘教授として、古今東西の文学や芸術を俯瞰する巨視的な講義を行なった機会に、中国各地で企画された 15 の講演の記録を集めたものである。兵役の代替義務を中国で果たす希望が認められなかった 1966 年の挫折から数えて半世紀近く経ってようやく、腰を据えての中国滞在が実現したことになる。原題で「講演」(conférences）ではなく談論、語らい（causeries）の語が用いられているのは、講師が一方的に教授する堅苦しい講演ではなく、聴衆からの反響を加えた双方向的な触発の機会という含みを持たせていると思われる（副題中の「交流」の語の使用もその趣旨に沿う)。ル・クレジオは 5 回にわたるこれらの長期滞在の機会に、中国各地を旅行し、作家や芸術家と交流するとともに、中国の古典を再読し、未知の近現代文学を仏訳・英訳で集中的に読む。実施された時系列に則して配列された講演録は、読み進めるにつれて中国文学への言及が増えるとともに、予めストックされていた西洋文学、アラブやインドやアフリカや中南米の文学や神話をめぐる知見と響き合い、自由闊達で壮大な比較文学的突き合わせが増えていく。それは聴衆になじみ深い文学を引き合いに出す要請であると同時に、講師自身が中国のとくに現代文学を同化する機会でもあった。

ル・クレジオには、文学が社会を変革する力を持つと信じたサルトル流の「参加の文学」は遠い昔の幻想としか思えず、むしろ、彼の出発点には、文学は現実世界にじかに働きかける力を持たないという冷めた認識がある。それでも、言葉で紡がれる文学には人と人を結びつける力があり、言語の壁も翻訳を介して乗り越えることが可能で、読み手が共感的想像力を通して書き手の同化と自己の異化を企てる最良の形式が書物であり読書であると考える。読書こそは多様な世界に自分を開き、それを自己のうちに招き入れる「開かれた窓」だというのがこの講演集の主旨である。

もっとも、翻訳ではどうしても伝わらない部分があり、たとえば詩の韻律的側面を別の言語に移し替えることはほぼ不可能である、という立場からすると、ル・クレジオの言語観、翻訳観はあまりに楽観的と言える。また、通常は、大国の帝国主義的ふるまいや社会的弱者に対する不正義をきびしく批判する作家が、中国における反体制勢力や少数民族の弾圧、国際秩序の力づくの変更といった行為に関してなぜ無言を貫くのかという疑問は残る。

ル・クレジオはフランスで生まれ育ったにもかかわらず、モーリシャス移民の末裔として、幼時から脱西欧中心的思考、辺境的感性を育んでいた。近代ヨーロッパを相対化し、世界各地の神話や古典に惹かれる傾きは早くから彼に備わる資質だった。とくにアニミズム的ないしシャーマニズム的想像力により、東アジアの文化とは強い親近性をもっていた。しかし直接的接触と読書の両面で本格的な触発が始まるまでに数十年を要した。日本語は言うまでもなく韓国語や中国語についてもじかに読みこなす語学力を習得するには至らないものの、言語の基礎を学習し、仏訳・英訳を介してであるが東アジアの古典のみならず現代文学を具体的作品に則して同化しようとする姿勢は、一昔前の極東贔屓のフランスの文人たちがあくまで上から目線のエキゾチズムで中国や日本を論じたのとは隔世の感がある。アジア文化に対するル・クレジオの姿勢はエキゾチズムとは無縁で、自分の想像力の本源と響き合うものを直観し、それを実質的に自分の肥やしにしようとする謙虚な貪欲さに特徴づけられている。

本研究を通して得た、ル・クレジオとアジア文化の関係をめぐる結論は以上のとおりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 中地義和	４．巻 1
２．論文標題 ボードレール批評における音楽	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ボードレール　詩と芸術	６．最初と最後の頁 115，132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masanori Tsukamoto	４．巻 345
２．論文標題 Mishima et la poetique de l'inhumain	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Revue des Sciences Humaines	６．最初と最後の頁 31，41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masanori Tsukamoto	４．巻 4
２．論文標題 L'usage de la photographie documentaire; Autour de Yoshino kuzu de Jun'ichiro Tanizaki et d' "Ambros Adelwarth" de Sebald	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Revue internationale de la photolitterature	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masanori Tsukamoto	４．巻 52
２．論文標題 Poetique de l'inhumain : De "La Desumanisation de l'art" d'Ortega y Gasset a "L'Institution" de Merleau-Ponty	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Zinbun, Annals of the Institute for Research in the Humanities, Kyoto University	６．最初と最後の頁 44，52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木雅生	4．巻 1
2．論文標題 訳者あとがき	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ル・クレジオ『文学と書物への愛を語る』	6．最初と最後の頁 232，244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 塚本昌則	4．巻 20455
2．論文標題 （書評）ル・クレジオ著『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 週刊読書人	6．最初と最後の頁 5，5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中地義和	4．巻 1
2．論文標題 訳者あとがき　語る、聴く、生きる	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ル・クレジオ著・中地義和訳『ビトナ　ソウルの空の下で	6．最初と最後の頁 211，229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 1
2．論文標題 Mon sort depend de ce livre : vie et art dans Une saison en enfer	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Les Saisons de Rimbaud, ed. Hermann	6．最初と最後の頁 231，245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 1
2．論文標題 La nostalgie du Bateau ivre	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Rimbaud. Le Bateau ivre a 150 ans, ed. L'Harmattan-AGA	6．最初と最後の頁 205, 213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 11
2．論文標題 Une gloire singuliere. Pour une meilleure reception de Rimbaud au Japon	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Revue italienne d ' etudes francaises [Online]	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/rief.7313	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 1
2．論文標題 Enfant, artisqte, Genie. Autoportraits du poete dans les Illuminations	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Revue d'histoire litteraire de la France	6．最初と最後の頁 49, 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu, COMPAGNON Antoine	4．巻 91
2．論文標題 合わせて80年を振り返る－文学の教師として、研究者として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日仏文化	6．最初と最後の頁 41, 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 中地義和	4．巻 1
2．論文標題 七歳の詩人がいた街角	5．発行年 2021年
3．雑誌名 APEF通信	6．最初と最後の頁 1，3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 1
2．論文標題 Arthur Rimbaud, Une saison en enfer (La Fortune de Dante)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 La Fabrique de Dante, catalogue d'exposition, Metis Presses-Fondation Martin Bodmer, Geneve, Suisse	6．最初と最後の頁 112，113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木雅生	4．巻 55
2．論文標題 『砂漠』から『黄金の魚』へ―ル・クレジオの1990年代における「新たな出発」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 仏語仏文学研究、東京大学仏語仏文学研究会	6．最初と最後の頁 323，338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 塚本昌則	4．巻 10
2．論文標題 現実の島と象徴の島―恒川邦夫『サン＝ジョン・ペルス―〈アジアからの手紙〉と『遠征』』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ヴァレリー研究	6．最初と最後の頁 62，69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 SIMON-OIKAWA, Marianne	4．巻 1
2．論文標題 Les paravents aux papiers colles	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Paravents japonais --par la breche des nuages, Paris, Citadelle et Mazenod	6．最初と最後の頁 210, 213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 13
2．論文標題 Le Clezio et la culture japonaise	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Les Cahiers Le Clezio (France)	6．最初と最後の頁 133, 144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu, SONG Li Jeong, ZHANG Lu	4．巻 13
2．論文標題 Chronologie	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Les Cahiers Le Clezio (France)	6．最初と最後の頁 167, 186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 中地義和	4．巻 43
2．論文標題 勒克莱芬奥与日本文化（陳嘉昆;・訳、高方・校）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 跨文化対話（Diaogue transculturel）（中国）	6．最初と最後の頁 138, 150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中地義和	4．巻 90
2．論文標題 文学と感染症―『ペスト』と『隔離の島』をめぐって―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日仏文化	6．最初と最後の頁 23，34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 NAKAJI Yoshikazu	4．巻 23
2．論文標題 Avant-propos	5．発行年 2020年
3．雑誌名 L'Annee Baudelaire (France)	6．最初と最後の頁 9，12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 SUZUKI Masao	4．巻 7
2．論文標題 ル・クレジオ『隔離の島』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ちくま	6．最初と最後の頁 12，13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 TSUKAMOTO Masanori	4．巻 54
2．論文標題 Le support de la lumiere : une theorie virtuelle du cinema chez Valery	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Revue de Langue et Litterature francaises	6．最初と最後の頁 11，21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 TSUKAMOTO Masanori	４．巻 54
２．論文標題 Qu'est-ce que "l'usage litteraire du langage" ? La parole a l'eat naissant chez Valery et chez Merleau-Ponty	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Revue de Langue et Litterature francaises	６．最初と最後の頁 225，242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SIMON-OIKAWA Marianne	４．巻 1093
２．論文標題 lse Garnier (1927-2020), une vie dans l ' espace	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Europe (France)	６．最初と最後の頁 317，318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SIMON-OIKAWA Marianne	４．巻 29
２．論文標題 Image et ecriture	５．発行年 2020年
３．雑誌名 L'Archicube	６．最初と最後の頁 91，96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 NAKAJI Yoshikazu	４．巻 1
２．論文標題 Comment recreer la musique des vers dans une langue courante ? L ' exemple du “ Bateau ivre ”	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Pour une autre litterature mondiale. La traduction franco-japonaise en perspective, ouvrage collectif sous la direction de Cecile Sakai et Nao Sawada, Editions Picquier	６．最初と最後の頁 117，125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 中地義和	4．巻 5
2．論文標題 音律の探求者（追悼・古井由吉）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文学界	6．最初と最後の頁 241，243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 中地義和
2．発表標題 ボードレール批評における音楽
3．学会等名 日仏会館日仏シンポジウム　ボードレール 詩と芸術（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 NAKAJI Yoshikazu, COMPAGNON Antoine
2．発表標題 Quatre-vingts-ans d ' enseignement et de recherche en litterature
3．学会等名 日仏会館「春秋講座」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 NAKAJI Yoshikazu
2．発表標題 La chance et le malheur d ' un poete francais. La reception de Rimbaud au japon
3．学会等名 中国、南京大学外国語学院主催のオンライン国際シンポジウム "Traduction et transferts culturels : Asie orientale - Europe"；（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名
SIMON-OIKAWA, Marianne

２．発表標題
Metamorphoses de l ' ecriture dans la poesie visuelle japonaise contemporaine

３．学会等名
Premiere journee internationale de poesie visuelle : recherche et creation（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
SIMON-OIKAWA Marianne

２．発表標題
Typographie, calligraphie, peinture : formes et enjeux de l ' ecriture dans la poesie visuelle japonaise depuis les annees 1960

３．学会等名
Journees d ' etude "Ecritures japonaises : concevoir des caracteres typographiques", BULAC / Inalco,（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
中地義和

２．発表標題
文学と感染症―『ペスト』と『隔離の島』をめぐって―

３．学会等名
公益財団法人日仏会館「日仏文化講演シリーズ」第341回（オンライン開催）（招待講演）

４．発表年
2020年

１．発表者名
塚本昌則

２．発表標題
非人間の詩学――オルテガ・イ・ガセット「芸術の非人間化」からメルロ＝ポンティ「制度化」まで

３．学会等名
京都大学人文科学研究所／アンスティチュ・フランセ関西＝京都共催「〈ポスト＝ヒューマン〉の人文学」（オンライン開催）（招待講演）

４．発表年
2020年

１．発表者名
SIMON-OIKAWA Marianne

２．発表標題
Poemes a voir : tradition et metamorphoses de la poesie visuelle en France（オンライン開催）

３．学会等名
上智大学（招待講演）

４．発表年
2020年

〔図書〕　計10件

１．著者名
中地義和編

４．発行年
2023年

２．出版社
水声社

５．総ページ数
351

３．書名
ボードレール　詩と芸術

１．著者名
鈴木雅生（翻訳、解説）

４．発行年
2022年

２．出版社
作品社

５．総ページ数
244

３．書名
ル・クレジオ『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』

１．著者名
BIVORT Olivier, GUYAUX Andre, MURAT Michel, NAKAJI Yoshikazu (sous la direction de)

４．発行年
2021年

２．出版社
Hermann (Paris)

５．総ページ数
322

３．書名
Les Saisons de Rimbaud

1．著者名 中地義和（翻訳、解説）	4．発行年 2022年
2．出版社 作品社	5．総ページ数 230
3．書名 ル・クレジオ著『ビトナ　ソウルの空の下で』	

1．著者名 塚本昌則（翻訳・解説）	4．発行年 2021年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 239
3．書名 エドゥアール・グリッサン著『マホガニー―私の最期の時』	

1．著者名 塚本昌則（翻訳・解説）	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店（岩波文庫）	5．総ページ数 318
3．書名 ドガ　ダンス　デッサン	

1．著者名 中地義和（編訳、注、解説）	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店（岩波文庫）	5．総ページ数 413
3．書名 対訳ランボー詩集――フランス詩人選（1）	

1．著者名 中地義和（翻訳、解説）	4．発行年 2020年
2．出版社 筑摩書房（ちくま文庫）	5．総ページ数 633
3．書名 ル・クレジオ著『隔離の島』	

1．著者名 中地義和（翻訳、解説）	4．発行年 2020年
2．出版社 作品社	5．総ページ数 331
3．書名 アルマ	

1．著者名 NAKAJI YOSHIKAZU（共著者）	4．発行年 2021年
2．出版社 Classiques Garnier	5．総ページ数 888
3．書名 Dictionnaire Rimbaud（pp.21-23, 74-78, 131-134, 173-176, 275-277, 700-702を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ル・クレジオのアジア滞在の年表作成を、研究代表者と、南京大学の張 Lu（ツァン・ルー）（Luの漢字は王へんに路）副教授と梨花女子大学校（ソウル）の宋起貞（ソン・キジョン）教授との共同作業で本研究初年度に完成し、パリで刊行されているル・クレジオの国際的研究誌『ル・クレジオ手帖』（Les Cahiers Le Clezio）第13号（2020年）に発表した。そこには、1966‐67年バンコクのタンマサート大学で兵役に替わる教職を果たした際のタイ滞在を皮切りに、2020年時点までの作家のアジア滞在が、極東（中国、韓国、日本）のほか、調べのつく範囲で広域アジアの国々（カンボジア、台湾、ウズベキスタン、インド、ヨルダン等）への滞在も含めて網羅されている。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　雅生 (SUZUKI MASAO) (30431878)	学習院大学・文学部・教授 (32606)	
研究分担者	ＭＡＲＩＡＮＮＥ　ＳＩＭＯＮ・Ｏ (SIMON-OIKAWA MARIANNE) (70447457)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	削除　2023年2月27日
研究分担者	塚本　昌則 (TSUKAMOTO MASANORI) (90242081)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	南京大学			
韓国	梨花女子大学			